

ムッラー・ムーサー・サイラーミーの史的探求： 『ハミード史』序論の検討から

Mulla Musa Sayrami's Pursuit of History: Considering the Introduction of Ta'rīkh-i ḥamīdī

小沼 孝博

はじめに

1. 『安寧史』から『ハミード史』へ
2. 『ハミード史』序論の構成
3. 序論における「過去の参照」

おわりに

はじめに

本稿は、新疆南部（中央アジア東部、東トルキスタン）で成立した代表的な史書である『ハミード史』の序論に注目し、著者ムッラー・ムーサー・サイラーミー（Mullā Mūsā Sayrāmī, 1836–1917）による「過去の参照」のあり方や傾向の一端を明らかにするものである。

18世紀中葉以来、清朝の統治下にあった新疆南部のオアシス地域は比較的安定した政情を保っていた。しかし、1864年（同治3）に勃発した大規模反乱を契機として、当地域に暮らすテュルク系ムスリム住民（現在のウイグル族に相当）は、大きな動乱の渦中に身を置くことになった。その一人であり、自らが経験した諸事件の顛末を活写する浩瀚な歴史叙述を残したのが、ムッラー・ムーサー・サイラーミーである。

1836年（道光16）に、ムッラー・ムーサーは天山山脈南麓の小オアシス、サイラムのイスラーム学者の家系に生まれ、青年期にクチャの学院で学びイスラーム諸学を修めた。1864年、彼はクチャで勃発したムスリム蜂起に参加し、在地のスーフィー教団の指導者であったラシッディーン・ホージャをハンに戴く政権の樹立と拡大に貢献した。ところが、1867年にコーカンド・ハン国出身の武将ヤークーブ・ベグの攻撃によって当政権はあえなく瓦解し、ヤークーブ・ベグ政権下ではアクス駐在の徴税官（zakawāṭchi）に下級書吏として奉仕する身となった。さらに1877年から78年にかけて、ヤークーブ・ベグ政権の崩壊と清軍による再征服という事態に直面すると下野し、その後約40年間はアクスに居を構え、不遇の中で著述と研究に没頭したという。そして齢70を越えて著



されたのが、『安寧史』(*Ta'rikh-i amniyya*, 1903年, 以下 TA), 及びその増補改訂版たる『ハミード史』(*Ta'rikh-i hamīdī*, 1908年, 以下 TH) である。

両書はともに、当事者・目撃者たる著者の記述の正確さに加え、広い視野と客観性を具備した優れた歴史叙述であり [Юдин 1969: 476–490; 濱田 1983: 384–388], 前述した諸事件の展開を知るための最も基本かつ重要な史料として研究に利用されてきた [新免 1987; 新免 2017; 濱田 1993; 菅原 1996; Kim 2004]。ムッラー・ムーサー個人の事跡や叙述傾向の検討 [安瓦爾 1984; Änwär 1986; 堀 1987; Schluessel 2020: 177–196], TA と TH のテキスト間比較 [Kim 1996: 7–9; 吾斯曼江 2012: 188–197] も進み, 20世紀を通じて創成されていくウイグル民族意識の萌芽とその限界を論じる研究 [Kim 1996; Klimeš 2015: 39–59] もある¹。

また注目すべきは、中華人民共和国において「民族文化」の復興が進んだ1980年代後半, TH と TA の現代ウイグル語訳が相継いで出版されたことである [TH/Änwär; TA/Muhämmät]。その刊行は、当時ウルムチに滞在していた堀直が、

1987年になって (奥付きでは1986年12月北京第1次印刷), エンヴェル=バイトゥル氏による現代ウイグル語訳と注からなる『ハミード史』が, ウルムチの書店に並びはじめた。その後, 新疆ウイグル自治区の各地で, 「この本は我が民族の歴史書で最高のものだ」と聞かされるようになった [堀 1988: 31]。

と述べているように, ウイグル民衆にも大きなインパクトを与えた²。青少年をターゲットとするコンパクトな伝記 [Mähmut 2003] や TH を始めとする歴史書を織り込んだ歴史小説なども出版され [新免 2017: 54–55], 現代ウイグル社会におけるムッラー・ムーサーの知名度は非常に高いものとなっている。

さて, これら現代ウイグル語訳を含め, 現段階で利用可能な TA と TH のテキストは, 表1に示すが如くである (所蔵・書誌情報の詳細は参考文献欄参照)。

-
- 1 Kim Hodong によれば, ムッラー・ムーサーは, モグーリスタン或いはイェッテ・シャフル (「七都市」の意, 現在の新疆南部にはほぼ相当する地域概念) と呼ぶ「地域」やそこに住むテュルク系ムスリム定住民という「人々」の枠組みを強く意識していた。しかし, 畢竟彼はシャリーアを重視する伝統的なムスリム知識人であって, 「民族意識の萌芽」は認められるも, それ以上に育つことはなかったという [Kim 1996]。
 - 2 刊行後に TH/Änwär は, 「民族団結」を損なう内容を含むという理由から発禁処分を受けたが, ある意味ここからもインパクトの大きさを窺い知ることができる。他方, 1989年に出版された TA/Muhämmät は, 2000年に第2版が刊行され, その後も長らく新疆各地の書店で目にする事ができた。

表1 TA と TH のテキスト

TA (1903年)	TH (1908年)
1. TA/Pantusov (1905年刊)	1. TH/Jarring (1930年入手)
2. TA/SP	2. TH/ZS (1911/7/7書写)
3. TA/Pelliot (1907/08書写)	3. TH/Änwär
4. TA/Jarring	
5. TA/Muhämmät	

書名の異なる TA と TH の間だけでなく、TA の各テキスト間、TH の各テキスト間でも増補や欠落等にもなう異同が認められる。現代ウイグル語訳の TA/Muhämmät にすら、定本であるはずの TA/Pantusov に見られない文言が存在するほどである。ただし、表1に掲げた8種のテキストは、以下のような共通した基本構成をもつ（ただし TH/Jarring は跋文を欠く）。

表2 TA と TH の基本構成

緒言	執筆意図、書名の由来、謝辞
序論	ノアの時代から1864年のムスリム反乱発生前までの前史
第1部	クチャにおけるムスリム反乱の勃発と展開、ヤークーブ・ベグへの屈服
第2部	ヤークーブ・ベグ勢力の到来と拡大、政権樹立～崩壊、清朝再征服、後日談
跋文	各都市の地誌、マザールの縁起、結論

従来の歴史研究でも利用されてきたのは、ムッラー・ムーサー自身の経験と見聞に基づいて執筆された第1部 (birinchi dāstān) と第2部 (ikkinchi dāstān) である。これに対して、2部構成の本論に前付けされている序論 (muqaddima) は、著者が直接経験していない過去の事象を「史書の裨益する部分より情報を得て」[TH/ZS: 8] 再構成したものである。当然、筆者にとって“現代史”ともいえる本論に比して、序論の叙述のオリジナリティーや正確さは格段に落ちる。その反面、序論はまさに「過去の参照」の集成であり、その方法や意図を把握することは、歴史家ムッラー・ムーサーがいかに歴史に向き合ったかを知る手がかりになると思われる。

以上のような問題意識のもと、本稿では、著者の歴史観やその背後に存在する社会的・文化的背景を探るといよりも、史書成立の過程における参照や引用というテクニカルな側面に注視する基礎的な検討を試みる。なお、本来であれば、TA・TH の各テキスト間の異同や増補改訂の過程を仔細に検討する作業も必要であろうが、これは筆者個人の能力を超える³。ひとまず本稿では、ムッ

3 この点については、[吾斯曼江2012: 188–197]を参照されたい。また現在、Eric Schluesselを中心とする研究グループがTHの校訂テキストの作成と英訳を進めている。膨大な労力を必要とする作業への取り組みに敬意を表するとともに、その完成と出版を鶴首して待ちたい。

ラー・ムーサーの自筆写本であり、現在利用可能なテキストの中で最も遅く成立した——故に文量が最も多い——TH/ZSにおける「過去の参照」のあり方を確認することを中心に進め、写本間の異同に関する言及は必要最低限に留めることにする。

1. 『安寧史』から『ハミード史』へ

本章では、先行研究に依拠しながら、ムッラー・ムーサーによる史書 (ta'rikh (kitābi)) 執筆の経緯をまとめておく。

まず蛇足ながら、前近代の新疆地域で作成された歴史叙述の流れを概観しておこう。近年、13-14世紀のモンゴル帝国期中世ウイグル語で記された、西ウイグル王国の歴史を叙述する文書 [Zhang & Zime 2011] の存在が知られるようになったが、まとまった文量をもつ最初のもは、16世紀中葉のミールザー・ハイダルのペルシア語史書『ラシード史』(Ta'rikh-i rashīdī, 以下TR)となる。その後、17-18世紀に記述言語がペルシア語からテュルク語へと移行し、また史書を兼ねる「伝記」(tadhkira) が一つのジャンルとして確立した [Thum 2014]。この間、必ずしも多数の史書が編まれたわけではなかったが、19世紀後半の動乱期を経ると、激しい社会変動が知識人を刺激して歴史文献が急増する [濱田1983]。そして、ナザルゴジャ・アブドゥセメトフ (Nāzārghoja Abdusemätov) の『タランチ・テュルクたちの歴史』(Taranchi türklarining tarikhi, 1922) を嚆矢に、以後「民族意識」を含む近代的な諸概念を取り込んだ歴史叙述が姿を現すことになる [Klimeš 2015: 88-97; Kamalov 2016]。なお、以上はすべてムスリム知識人の手によるものであるが、新疆地域の特徴として、天山北部におけるオイラト語 (17-18世紀) や満洲=シベ語 (19-20世紀) の歴史叙述の存在も無視できない。

さて、TAとTHが上述した社会変動による刺激を受けて登場した作品群の一つであることは疑うべくもない。TAは1903年12月31日に脱稿し、早くも1905年にロシア帝国のカザンで、パントウソフの編集による活字本が出版された。冒頭の緒言によれば、マルギラン出身のアクサカル⁴、ダードハー・ムハンマド・アミン・バイ (Dādkhwāh Muḥammad Amīn Bāy) による勸奨が、老境に達していたムッラー・ムーサーを史書執筆に向かわせるきっかけとなった。そしてムッラー・ムーサーは、一つは勸奨者の名に含まれる「平安」(amīn)、一つは当時のモゲーリスターンで確立された「安定と安寧」(tincliq wā amniyatlik) に託け、当書を Ta'rikh-i amniyya と名付けたのである [TA/Pantusov: 6]。ところが、その刊行後もムッラー・ムーサーは増補改訂を継続し、書名は同じながらも、TA/Pelliotではムハンマド・アミン・バイの名が削除され、「アミンに捧げられた歴史」の含意は消えてしまった [濱田1983: 384-385]⁵。

4 アクサカル (aq saqal) の原義は「白い髭」であり、転じて「長老」「頭目」の意で用いられたが、ここではロシア国籍をもち、新疆各都市においてロシア当局に下級役人としても仕えたムスリム商人を指す [Brophy 2016: 74-78]。

5 当時濱田が参照しえなかったTA/SPとTA/Jarringにおいてもムハンマド・アミン・バイへの言及はない。

なお、TAの真の執筆依頼者は別に存在するという見解が以前よりある [Юдин 1969: 481]。オリデンブルグ (С. Ф. Ольденбург) は、第一次東トルキスタン探検 (1909–1910) の途上、ムッラー・ムーサーは自身の著作 (ここではTAを指す) を、駐カシュガルのロシア領事ニコライ・ペテロフスキー (Н. Ф. Петровский, 在任期間1882–1902) の求めに応じて執筆し、その財政的支援は2年間に及んだという情報を得ている [Ольденбург 2018: 548]。TAの完成後、わずか2年でカザンから出版されたことも、それを裏付けるように思われる⁶。

さらに1908年11月5日、ムッラー・ムーサーは書名を *Ta'riḫ-i ḥamīdī* に変更したテキストを書き上げた。その約1年3ヶ月後の露暦1910年2月8日、トクスンでオリデンブルグに面会したムッラー・ムーサーは、「著作を6年前に執筆し始め、それを4年後に書き終えた」 [Ольденбург 2018: 555] と語ったというが、この「著作」はまさにTHを指している。またTHの緒言においてムッラー・ムーサーは、書名の由来について次の三点を指摘している [TH/ZS: 9–10]。

- ①モゲーリスターンの地と民がオスマン朝のアブドゥルハミト (2世) に帰属していた時期の諸事件が忘却されぬように。
- ②ミールザー・ハイダルが自身の史書を当時の支配者アブドゥラシード・ハンの名にちなんで *Ta'riḫ-i rashīdī* と命名したことに擬え、現下のムスリムの庇護者たるアブドゥルハミトの名をとった。
- ③『ハディース』の文言に従い、いかなる者であれ、その者が生きる時代の支配者について知らねばならない。

このように、当時のオスマン皇帝アブドゥルハミト2世 (r. 1876–1909) の名をとり、今度は書名に「ハミード (ハミト) に捧げる歴史」を含意せしめたのである。周知のように、アブドゥルハミト2世は汎イスラーム主義を標榜し、ヤーケーブ・ベグも遣使してオスマン朝を宗主国と認め、その見返りとして武器と軍事顧問の供与を得ていた [Kim 2004: 146–155]。アブドゥルハミト2世を「現下のムスリムの庇護者」と見なす姿勢からは、書名の変更がムッラー・ムーサーなりの汎イスラーム主義への呼応であったという見解 [堀 1987: 88; Kim 1996: 3] が導き出される。

これに対して濱田は、TA/Pelliotの末尾 [205b–206a] において、無名無視のままに人生が終焉を迎えることを嘆くムッラー・ムーサーが、TA完成年のA.H. 1321年 (A.D. 1903–1904) が「名声」 (yakhshi at⁷) のクロノグラム (abjad ḥisābi) と一致することを見出して詠んだ四行詩 (rubā'ī) に注目する。

6 さらにオリデンブルグの日記には続けて、「興味深い、私の手紙が何らかの影響を与えたのだろうか」 [Ольденбург 2018: 548] と記されている。真意は不明ながら、事前にオリデンブルグからペテロフスキーに何らかの働きかけがあったのかもしれない。

7 یخشی ات : 10+600+300+10+1+400 = A.H. 1321 = A.D. 1903–1904.

Yettilär äkhirgha ‘umrum, chiqmaydi bir yaxshshi at.
Haif ghaflatda ötüymän, shāyad ki olghay yaxshshi at.
Yakhshiliq umīd tutup, tārikh futupmān yādgār.
Sāl-i tārikhin ägār sorsa, degäysiz yaxshshi [at].

わが命終わりに近づけど名声は出でず。
我、不正・無視のうちに過ごしたり。名声あれかし。
善事を望みて、史書を書き残したり。
著作の年を問われれば、汝答えよ「名声」と⁸。

これより濱田は、著者の真意は無名と無視を恐れ「名声」を希求することにより、「清朝支配の平安を祝ぐことも、アブデュルハミトの名を自らの作品に冠することも、彼にとっては「名声」を世に遺す方便」であったと看破する〔濱田1983: 385-386〕。Kim は、汎イスラーム主義への接近と表裏をなすものとして、清朝支配に対する態度の変化（期待から落胆へ）を書名変更の理由の一つに挙げるが〔Kim 1996: 2-3〕、TH の本論に唯一添加された第2部第20章は中国（清朝）皇帝の徳の高さを讃える内容を持ち、その理由と齟齬する。濱田の指摘をふまえれば、この矛盾や日和見の態度もやはり、筆者の名声欲によって説明されえらると思われる。

2. 『ハミード史』序論の構成

TA と TH の各テキストにおいて、各部・各章の基本的な枠組み、そこで叙述される事件の流れは、ほぼ同一である。しかし、最初に刊行された TA/Pantusov から最後の TH/ZS に到る過程で随所に大幅な修訂が加えられ、表現が完全に一致する段落や文章はほとんど存在しない〔吾斯曼江2012: 188〕。また、両者の章数を比べれば、序論が3から6へ⁹、第2部は19から20¹⁰へ増加している。すでに Kim が指摘する如く、TA/Pantusov の刊行以後も継続された著者の増補改訂の努力の多くは序文に注がれ、全体に占める序文の分量も TA/Pantusov で10分の1であったものが、TH/Änwär では5分の1に達した〔Kim 1996: 4〕。以下本章では、この TH 序論の全体的な構成を見ていくことにしたい。

TA・TH とともに、「冒頭は史書の裨益する部分より情報を得、続く部分は〔自らの〕知見より〔情報を〕求めて、その記述と言葉を確定」〔TH/ZS: 8-9〕したものであり、序論と本論では主たる情報源が異なっている。そして序論の執筆目的は、TA・TH とともに序論第1章の冒頭に明記されている。

8 原文を確認したうえで〔濱田1983: 386〕の訳を一部改変している。

9 TA/Pantusov の序論第1章が、TH/ZS までの過程で第1~4章に分かれ、全体で6章となった。

10 上述したように、中国（清朝）皇帝の徳の高さを讃える新章（第20章）が添加されている。

意識を示せば次のようになる。

古の時代、史書においてイエッテ・シャフルはモグーリスターンと呼ばれ、また古き文書は「モグーリーヤの暦では」(Moghūliya hisābida) で結ばれているが、その意味と由来は何か。いつからイスラーム政権の榮譽に与ったのか。支配者らはいかなる宗教的集団 (qaysi madhhab wā qaysi millat) であったか。中国皇帝 (khāqān-i chīn) による征服より幾年か。これらの問題が各史書の参照のもとに闡明されねば、本書執筆の意図は明瞭たりえない [TA/Pantusov: 7; TH/ZS: 10]。

このような意図のもとに執筆された TH 序論は6章から構成されている。表3から明らかのように、著者が生きた時代のモグーリスターン／イエッテ・シャフルの状況に連なる歴史的諸要素——テュルク人の系譜、モンゴルと中国の王統、在地支配者 (アミール、ベグ、ホージャ) の系譜と事跡、トゥンガン(回民)の起源——を交錯させつつ再構成した地域史としての性格を序論は備えている。

表3 TH 序論の基本構成

第1章	ノアの時代からテムジン誕生の前まで、テュルクとモンゴルの系譜
第2章	チンギス・カン以降のモンゴル王統 (～ティムール朝)、中国史の挿入
第3章	ドゥグラト家のアミールやベグの歴史 (モグール・ウルス期～清代)
第4章	トゥグルク・テムル・ハン以降の王統、カシュガル・ホージャ家、清朝征服
第5章	ジャハーンギール・ホージャの聖戦 (1826–28)
第6章	古代中国皇帝の改宗譚、トゥンガンの起源と蜂起

TH で参照されている史書について、ムッラー・ムーサーは、「いくつかの文言を *Rawdat al-ṣafā*, *Muntakhab al-tawārīkh*, *Ta'rikh-i rashīdī*¹¹ 及びその他の史書から選び取り入れた」と述べている [TH/ZS: 9]。この三書は、順にミールホンドの『清浄の園』(15世紀末)、ムハンマド・ハキーム・ハンの『選史』(1843年 [河原2020])、そしてミールザー・ハイダルの『ラシード史』(1543年)となる。「その他の史書」を含めた場合、TH においては18の史書から引用がなされている [Kim 1996: 4]。

ただし、ムッラー・ムーサーが利用した文献の名が、必ずしもすべて挙げられているわけではない。たとえば、TH/ZS 序論の第4章は、モグールのハン家を巻き込んだカシュガル・ホージャ家のイスハーク統とアーファーク統の抗争に関する記述を含む。本文中に言及はないが、その情報源が『ホージャガーン伝』(*Tadhkira-yi khwājagān*) であることは、内容からして疑いない。果たしてムッ

11 TA/Pantusov では「*Rawdat al-ṣafā*, *Ta'rikh-i rashīdī*, *Shahrukhiya*」[TA/Pan: 7] の順となっており、コーカンド・ハン国史料がムッラー・ニヤーズ・ムハンマド・コーカンドの『シャールフ史』(*Ta'rikh-i shahrukhi*) となっている。

ラー・ムーサーは、オリデンブルグに向かって『ホージャガーン伝』が利用史料の一つであったと語っている [Oльденбург 2018: 555]。また TH の序論は、TA に比して、口碑に基づく情報をふんだんに盛り込んでいる。

序文においてムッラー・ムーサーは、史書や口碑から有用な情報を選択的に引用し、必要に応じて改変、追加、消去、再構成をおこない、かつ論評を随所に挿入している。テュルク語で執筆されているとはいえ、ペルシア語史書の定型要素 [Quinn 2021: 6–8] を踏襲した作品といえよう。一方で、随所に増補や論評を加えたことで、たびたび話題の脱線が生じており、TA/Pantusov の序論と比べると行論はかなり錯綜している。以下、そのような“読みにくさ”の要因も意識しつつ、TH 序論で「過去の参照」がどのようになされているのか、いくつか事例を示してみたい。

3. 序論における「過去の参照」

3.1. モンゴル（モグール）に対する評価

TA・TH からは、種族としてのテュルク (Türk), 宗教的集団としてのムスリム (Muslmān¹²) というムッラー・ムーサーの自己認識を伺うことができる。故に序論第1章において、著者の視点は、まずテュルク人の起源と系譜へと向かう。前者に関連して、ユーラシア中央部に分布するテュルク諸族の間には、ヌーフ (Nūh, ノア) の第3子ヤフェス (Yāfis, ヤペテ) の息子であるテュルク (Türk) の子孫に位置づける系譜観念が共有されていた。この観念は TA・TH においても継承されているが、ムッラー・ムーサーが生きた時代性や地域性を反映する情報も見出せる。

テュルクをいくつかの史書ではヤフェス・オグラン（「ヤペテの息子」の意——小沼註）と呼び、キューマルス¹³と同時代人と述べている。概して、テュルク、モグール、タタル、キプチャク、ウイグル、マンジュ、ナイマン、チルケス、ダチン、ダゲスタン、トルグート、ノガイ、バルラス、チョラース、ジャライル、ディリン、ジュルジュト、ヤーージュージ、マーージュージなどの数千の部族と数千の氏族があり、その集団の血統はヤフェスの息子テュルクに連なるのだ [TH/ZS: 15]。

12 通常 Muslmān とはイスラーム教徒一般を意味するが、他方で Klimeš が指摘するように、ムッラー・ムーサーは Muslmān の語を、周辺の諸集団（クルグズなどテュルク系ムスリムを含む）から区別される「イエツテ・シャフルの在地住民」という意味でも用いている [Klimeš 2015: 48]。あたかも「我々」と訳し得るような Muslmān の用法は、18世紀の『ホージャガーン伝』 [Brophy 2016: 33–34] や他地域 [塩野崎 2017: 197–202] でも認められる。

13 近世ペルシア語史書に頻繁に挿入されるキューマルスの説話と効用については、[Quinn 2021: 111–133] を参照。

多様な集団¹⁴の起源がテュルクに連ねられており、そこにはマンジュ (Manjū / 満洲)、ダチン (Dāching / 大清)¹⁵、そして1771年にヴォルガ河流域より新疆北部 (ジュンガリア) に帰還したトルグートの名も見られる。これらは先行するペルシア語史書に含まれるものではなく、清朝統治下の新疆に暮らした人間ならではの見解である¹⁶。

テュルク以降の系譜を叙述する中で不可避の課題となってくるのが、モンゴルの王統との関係である。序論の執筆に利用されたペルシア語史書の多くは、13世紀以降の中央アジア～イランにあったモンゴル人政権あるいはモンゴルに由来する後継政権 (ティムール朝を含む) で成立したものである。宇野の見解にしたがえば、それらペルシア語史書では、種族的にテュルクとモンゴルが関係づけられ、両者が一種のもの、或いは共通の祖先から分岐したものと見なされている。また、ラシードウッディーンの『集史』(Jami' al-tawarikh) 以来、ガザン・ハンのイスラーム改宗 (1294) を当為とし、モンゴル人の系譜をイスラームの世界史へ接合するため巧みな情報操作が施され、その代表例がオグズ・ハン説話の挿入であった [宇野2002]。

序論の第1章において、ムッラー・ムーサーは淡々とテュルクとモンゴルの系譜を書き連ねていく。ところが、“巧みな情報操作”の一つであるアランゴアの日 (月) 光感精説話の段に及ぶと、系譜の説明を中断し、その誤謬を痛烈に批判する [TH/ZS: 19–22; Schluessel 2020: 179–180]¹⁷。その矛先は、アランゴアが感精した光を天使ガブリエルと解釈したり、聖母マリアからのキリストの誕生に結びつけたりする見解 [濱田2008: 52–55] など、この驚異をなんとか合理的に解釈しようとする先学にも向かい、ミールホンドの『清浄の園』も批判の対象となっている。ムスリムたるムッラー・ムーサーにとって、アッラーの慈悲の発露たるこの種の驚異は、改宗前のモンゴル人、すなわち異教徒たるアランゴアの身に起こりうべくもないものであった。ムッラー・ムーサーは、アランゴア伝説はモンゴル王統の聖性を創作するための作為であり、史家の君主に対するおべっか使いであると切り捨てるのである。

モンゴルに対する否定的評価は、モンゴル帝国からティムール朝の時代を扱う第2章でも一貫している。ここでムッラー・ムーサーは、チンギス、フレグ、ティムールらが中央アジア・西アジア征服時になしたイスラーム文化の破壊やムスリムの虐殺をあげつらう。「古の時代における王国の法規を創成した帝王はジャムシードであるが、^{バイガンバル}預言者 (ムハンマド——小沼註) の時代以降に王国の仕組みと法規を定めたのはチンギス・カアンである。」 [TH/ZS: 25] というように、破壊と表裏一体である新秩序の創造という面に留意するものの、チンギスによる「破壊は極限に達し、筆舌

14 すべてが実在した集団ではない。『クルアーン』に言及されるマージュージとマージュージは、旧約・新約聖書のゴク (Gog) とマゴク (Magog) に対応し、いずれにおいても神の敵対集団として描かれる。

15 ムッラー・ムーサーは、清朝皇帝を輩出する「氏族がダチンと称されている」と説明している [TH/ZS: 27; Onuma 2014: 44]。つまりダチンは、アイシン・ギョロ (愛新覺羅) 氏族に相当すると見てよい。

16 当地のテュルク系ムスリムの間には、モンゴル、チーン/中国、チベットなどの非ムスリム集団をヤフェス・テュルクの系譜に取り込む認識パターンが存在した [Schluessel 2020: 190–191]。

17 このような批判は TA/Pantusov には見られない。

に尽くしがたい」[TH/ZS: 24]と容赦ない。

異教徒としてのモンゴル人への否定的評価は、もちろんムッラー・ムーサーに限ったことではない。彼の筆致は参照した史書における評価からも多分に影響を受けていると思われるが、同時に指摘しておくべきは、異教徒たるモンゴル人の存在は彼にとって決して遠い過去のものではなかったことである。17世紀後半から18世紀中葉まで東トルキスタンは、ムッラー・ムーサーもモンゴルの一支と見ているカルマク（オイラト）人、つまり遊牧国家ジュンガルの支配下にあった。そしてその時代、征服されたカザフ草原南辺のサイラムから強制移住させられた一部の人々が、のちに天山南麓に新たなサイラムを形成し、ムッラー・ムーサーはその子孫であった [Юдин 1969: 486–487; 小沼 2022: 12–14]。また、彼はアランゴアの生きた時代を考証し、彼女がカラシャール付近に住むカルマク人であったとも述べている [TH/ZS: 19]。清軍によるジュンガル征服時にカルマクの人口は激減し、その存在感は薄れたものの、天山南麓で生まれ育ったムッラー・ムーサーにとって、近接するカラシャールやウルドゥズ草原に暮らすカルマク人は身近な“異教徒としてのモンゴル人”であり、彼らの存在は TH 序文におけるモンゴル人への否定的評価を助長する因子になった。

他方、イスラーム教に改宗したトゥグルク・テムル・ハン (r. 1347/8–62/3) 以降のモゲール・ウルス（東チャガタイ・ハン国～ヤルカンド・ハン国）の歴代ハンに対する著者の評価は、一転して肯定的となる。ただし、序論の章構成において留意すべきは、モゲールの歴代ハン（第4章）に先行して、ドグラト家アミールの系譜と事跡が第3章を構成していることである。この些か奇妙な順序を理解するためには、まずトゥグルク・テムルの発見と擁立の功労者であったアミール・ボラジ以来、孫のミールザー・アバーバクル (d. 1514) に至るまで、ドグラト家がイエッテ・シャフルの統治者であったことがポイントの一つとなろう。すなわち、序論におけるムッラー・ムーサーの主眼はイエッテ・シャフルの地域史を描くことにあり、当時なお北方草原で活動していたモゲールのハンたちより、ドグラト家は優先されるべき存在であった。もう一つは、第3章の末尾で、19世紀中葉の清朝治下で活躍したミールザー・アフマド・ワン・ベギム (Mīrzā Aḥmad Wang Begim, 以下「アフマド^{ワン}王」)¹⁸が、このドグラト家の系譜に連なる人物として紹介されることである [TH/ZS: 44–45]。ムッラー・ムーサーは、イスラームの支配者としてのアフマド王を高く評価しており¹⁹、またアフマド王は本論第1部の冒頭に語られるクチャ蜂起の勃発時に「殉教」を遂げる [濱田 1993: 287]。モゲールのハン家に対するドグラト家の先行は、以上の二点を意識したが故であろう。

18 アフマド王の事跡、特に1850年代の財政危機に際する克服策（銅山開発、増税）への主体的関与については、Kim Kwangmin が検討している [Kim 2016: 161–163, 172–176]。

19 この点については、近刊予定の拙稿「清朝統治下の東トルキスタンにおける“マンジュの時代”」（2018年1月脱稿、提出済み）も参照されたい。

3.2. 中国史料 *Gāngjāng* の参照

序論で参照される史書中、特に異彩を放つのが *Gāngjāng* である。ムッラー・ムーサーは第2章で、1251年のモンケの即位後に実施された二大遠征、すなわちクビライの「東征」とフレグの「西征」に言及する。前者について、アルタイ・ハン (Altāy Khān, 金朝皇帝) に対するクビライの勝利²⁰を述べた後、次のように記している。

中国皇帝の *Gāngjāng* という史書がある。ハンたちの歴史 (khānlarning tāriklari) というものがあるという [TH/ZS: 26]。

そしてこれ以降、しばらく *Gāngjāng* に基づく中国の王朝・王統の説明がなされ、それが終わると再び本筋に回帰してフレグの西征が語られるのである。この TH に挿入された中国王朝史については、すでに Light が基礎的な分析をおこなっているが [Light 2012: 168–170]、以下、より踏み込んだ考察を試みてみたい。

この *Gāngjāng* が「綱鑑」(Ch. *gangjian*) の音写であることは確実である。明清時代、袁黄 (1533–1606) 『歴史綱鑑』、王世貞 (1526–90) 『綱鑑會纂』、呉乗権 (1655–1719) 『綱鑑易知録』(康熙 50/1711 年序) など、朱熹『資治通鑑綱目』に倣った体裁を有し、「綱鑑」を書名に冠する史書が複数編纂され、簡明易読故に広範に流布した [呉・施 1960, 1: 点校者説明]²¹。「綱鑑」は編年体の史書であり、神話・伝説の時代である「三皇紀」「五帝紀」より始まり、『歴史綱鑑』と『綱鑑會纂』は「元紀」まで、『綱鑑易知録』は「明紀」まで、各王朝の皇帝や王ごとに年を追って事跡が叙述されていく。したがって、TH にいう「ハンたちの歴史」とは、まさに「紀」(帝王の事跡録)の集成たる「綱鑑」の性格を捉えての謂である。

ここで問題となるのは、ムッラー・ムッサーがいかにして漢文で記された「綱鑑」にアクセスしえたかである。彼は以下のように述べている。

^{ヒターイ}中国の歴史家は「綱鑑」という「皇帝たちの史書」より語り、翻訳者 (ṣāhib al-tarjuma) のムッラー・グルバーン・アリー・ハーッジー・エフェンディ・チョチェッキ (Mullā Qurbān ‘Alī Ḥājī Efendi Chöchäkī) は、皇帝たちの歴史と宗教的集団 (millat madhhablari)、いかなる宗教に属したかを、中国の歴史家に対して、[或いは] 聡明な学者たるムッラーより尋ね、また歴史家を介して翻訳した [TH/ZS: 27–28]。

ここで翻訳者として名の挙がる人物は、新疆北部のタルバガタイ (チョチェッキ) でイマームを務

20 実際の金朝の滅亡(1234)はオゴデイの親征によるので、ここにはクビライによる南宋の征服との混同がある。

21 「綱鑑」に類する漢文史書が1644年に満洲語に翻訳され、さらに1920年代にはその満洲語訳からモンゴル語抄訳も作成されている [橘 2015]。

めていたタタール人、クルバン・アリー・ハリディー（Qurbān‘alī Khālidī）である。また、書名は挙げられていないが、彼の代表作たる *Tawārīkh-i khamsa-i sharqī*（『東方五史』1908完、1910刊、以下 TKhSh）には、*Gāngjāng* に依拠した25の中国王朝史の章節 [TKhSh: 718–743] が存在する²²。ムッラー・ムーサーも述べているように、クルバン・アリー自身が漢文の「綱鑑」を直接読解したわけではなく、その内容把握は中国人（おそらくトゥンガン）のインフォーマントを介してのものだった。各「綱鑑」に「清紀」は存在しないが、TKhShには「第25王朝」の Dāychīng（大清）の項があり、光緒帝（r. 1875–1908）まで言及があるのは、それ故であろう。一方、中国の帝王の治世がイスラーム史上のどの人物と時期が重なるかについて、クルバン・アリー独自の考証も加えられている。TH/ZSの脱稿は1911年7月7日であるので、TKhShの入手の早さに驚かされるが、いずれにせよムッラー・ムーサーはTKhShを参照することで中国史料「綱鑑」の存在を知り、早速それを利用してTHを増補したのである²³。

表4 周紀の帝王号の異同

帝王号	TKhSh	『綱鑑會纂』	『綱鑑易知録』
文王	×	○	×
昭王	○	×	○
悼王	×	○	×
哀王	○	○	×
思王	○	○	×

*○=王号あり ×=王号なし

各「綱鑑」では、「紀」に項目立てされている帝王号や人数に若干の異同が見られる。ただし、この異同に注目しても、インフォーマントがどの「綱鑑」に依拠してクルバン・アリーに情報を提供したか、その特定は難しい²⁴。例えば、TKhShにおける「第6王朝」の「周」を、『綱鑑會纂』と『綱鑑易知録』の「周紀」と対照させた場合、文王・昭王・悼王の異同は『綱鑑易知録』に一致するが、哀王・思王の異同は『綱鑑易知録』に一致する（表4）。そもそもTKhShにおける帝王号の音写が『綱鑑會纂』と『綱鑑易知録』のどちらにも対応しないものもある。

さて、ムッラー・ムーサーは、4,800年にわたり25の王朝と254の帝王が中国を統治したと述べ

22 詳しい内容については、[Light 2012: 159–168] を参照。

23 そのほかにも TH/ZS には TKhSh を参照した叙述が見られる。前述の如く、ムッラー・ムーサーはアランゴアの聖性を否定するが、その根拠の一例として、モンゴル人のセクシャルな悪習を紹介している [TH/ZS: 21]。情報源をムッラー・ムーサーは明らかにしていないものの、それが TKhSh の記述 [TKhSh: 271–272; Frank 2009: 339–340] に拠っていることは確実である。なお、クルバン・アリー自身はこの悪習の実在に懐疑的である。

24 Schluessel は *Gāngjāng* を『綱鑑易知録』に比定している [Schluessel 2020: 231, n. 20]。その可能性はあるものの、以下の述べるように、十分に立証しえない。

るが、実際に TKhSh の参照により名の挙がる帝王は、表5に示したように、9名に過ぎない。最初の2名、天地開闢の神である「盤古」(Ch. Pangu) に相当する Füng, 及び「伏羲(氏)太昊」(Ch. Fuxi(shi) Taihao) に相当する Taykhū Fūs は、ともに神話・伝説上の人物である。また「ハン」ではないが、TKhSh の「綱鑑」参照部分とは別の箇所が登場する Lūwāng を、ヌーフ(ノア)に比定し、中国人が彼の「聖教」(sharī'at-i dīm) を信仰していると紹介する。Lūwāng を「閻(羅)王」(閻魔大王)に、或いは「呂王」の音写と想定して呂尚(姜子牙、すなわち太公望)に比定する見解があるが [Light 2012: 162, n.51; Schluessel 2020: 30], ともに「聖教」という点で蓋然性は低い。むしろここは「魯王」の音写と見て、魯出身である孔子を指すと考えるべきであろう²⁵。したがって、実在の帝王として言及される「ハン」は、宋・元・明・清(第22~第25王朝)の6名である。

表5 TH/ZS に引用される「綱鑑」の内容

帝王号	内容	TKhSh	『綱鑑易知録』
Füng	中国史の開端, 第1王統の始祖	○	「三皇紀」: 盤古 / Pangu [呉1960, 1: 1]
Taykhū Fūs	治世はアダムより2,700年後, ムハンマドより340年前, テュルクの息子 Fūdāk に相当, 別名 Fūwāng	○	「五帝紀」: 伏羲(氏)太昊 / Fuxi(shi) Taihao [1: 4]
Lūwāng	ヌーフに相当, 中国人は Lūwāng の教え (sharī'at-i dīm) を信仰	○: 『綱鑑』引用とは別箇所, インフォーマント提供の情報	×
Tāyduz [īng] Shengdī	第22王朝の第3宋朝 ²⁶ を創始, 治世17年, アッバース朝カリフ Qādir Bi'llāh (第25代, 在位991-1031) と同時代人, 同統から皇帝18名, 統治期間計321年 ²⁷	○	「宋紀」: 太祖神德皇帝 / Taizu Shengde huwangdi, 「合兩宋一十八帝, 共三百二十年」 [7: 2487]
Jūwādī Shengdī Khwāngdī	即位2年後にクビライにより北京 (Bejīn) 制圧	Jūwādī Pīng Khwāngdī	(趙) 帝昺 / (Zhao) Di Bing ²⁸ [7: 2483]
Qubilāy	第23王朝の元 (Īwāng ²⁹ < Ch. yuan) を創始, 皇帝9名, 統治期間計88年	○	「元紀」: 「元十帝, 共八十九年」 [7: 2575]

25 wāng は「王」の音写に由来するが、クルバン・アリーとムッラー・ムーサーは漢字に通じておらず、漢字元来の「王」の字義まで了解しているわけではない。なお、魯の君主の爵位は「侯」であり、各「綱鑑」に「魯王」なる帝王は登場しない。

26 TKhSh では、南北朝時代の宋を「第1宋朝」、隋を「第2宋朝」としている。

27 TKhSh に各王朝の皇帝号とその在位年数は列記されているが、皇帝数と統治期間の合計は存在しない。ムッラー・ムーサーが自ら計算したのであろう。

28 Jūwādī/Jūwādī における Jūwā/Jūwāw は、宋の帝室の姓である「趙」の音写と思われる。

29 [TH/Ānwār: 75] は Äywang と読むが、これは誤りである。

帝王号	内容	TKhSh	『綱鑑易知録』
Täydzīng Khwāngdī	第24王朝の明 (Mīng) を創始, ティムール朝期に相当, 皇帝17名, 統治期間計270年	○	「明紀」: 上記のような表記はないが, 皇帝17名の「紀」が立てられ, 統治期間が計270年という記載あり [8: 2977]。
Shūnjī b. Täydzūng	北京制圧, モグール裔マンジュ氏族 (Moghūl awlādi Manjū nasli), 現在 (ca. 1911) までハンを輩出する一族 (urūq) は大清 (Dāching) と呼称される。	Shūngchī Dāychīng	「清紀」なし × (順治帝) × (大清)
Kāngshūy Khān	現皇帝, 9代目 ³⁰ , 統治期間計262年	Kūāngsūy Khān	× (光緒帝)

* ○ = 帝王号の綴りが TH/ZS と一致する。

『綱鑑』に基づく中国王朝史は, クビライの「東征」(中国遠征) に筆が及んだので, 挿入されたと考えられる。その結果, クビライの「東征」とフレグの「西征」の間に断絶を生じさせ, かなり不自然な印象を残してしまっているが, 光緒帝まで言及することで, 本論で展開する“現代史”の前振りとしての意義は果たしているといえよう。

3.3. ジャハーンギールは「藪の中」

TH 序論では, 史書ばかりではなく, 伝承・伝聞などの口碑を情報源とした叙述が随所に見られる。第5章で述べられるジャハーンギールの聖戦の顛末から, それを具体的に確認してみよう³¹。

1826年(道光6), カシュガル・ホージャ家アーフアーク統の聖者裔に属するジャハーンギールは, 信徒やクルグズ勢力を糾合し, 清朝治下のカシュガルを攻撃した。現地ムスリム民衆の呼応もあり, ジャハーンギールはイエッテ・シャフル西部の諸都市を半年間支配下に置くことに成功したが, 清朝の援軍が到来すると対抗できずに逃走した。1828年, ジャハーンギールは清軍に捕縛され, 北京に押送されて紫禁城午門で道光帝 (r. 1821–50) に献俘された後, 市中で処刑された。

第5章の叙述 [TH/ZS: 62–65] も, 上述の事件の推移にしたがって構成されている。前半は, コーカンド・ハン国のペルシア語史書『シャルフ史』に依拠し, 援軍要請を受けたコーカンド・ハン国のムハンマド・アリー・ハンの到来, そしてカシュガル攻城戦の推移を描く [TSh/Pantusov: 114–116; TSh/1787: 87b–90b; TSh/C468: 147b–150a]。後半で描かれる清軍の到来からジャハーンギールの捕縛と処刑に至る経緯は, おそらく著者が口碑に基づいて組み立てたものと考えられる。特に興味深いのは, すでに新免 [2009: 124–125] や河野 [2016: 16–20] が検討しているように, ジャハー

30 TKhSh は順治帝を「大清」の初代皇帝としている。

31 第6章で述べられる古代中国皇帝タワン・ハン (Tāwāng Khan) の改宗譚も伝承 (riwāyat) に基づいている。

ンギール捕捉の場面で、ミールザー・ウスマーン・ベイス・ベグ (Mīrzā ‘Usmān Beysi Beg)³²の第二子であったクチャ出身のイスハーク・ベグ (Ishāq Beg) の立ち回りがクローズアップされている点である。以下、両者の研究を参考にしつつ、関連する諸史料を検証してみたい。

まず、TH/ZS によれば、追い詰められたジャハーンギールは、清軍に加わっていたイスハーク・ベグに対し、自身を捕らえて清の將軍へ献ずるよう言葉をかけた。イスハーク・ベグが恐縮すると、ジャハーンギールは頭巾で自ら手を縛り、その布の先を掴んで連行するよう彼に命じた。イスハーク・ベグはそれに従い、^{ヒターイ}中国の將軍らのもとへジャハーンギールを連行する。「大ハンの敵をイスハーク・ベグが捕らえた」という知らせを受けた將軍は、イスハークにジャハーンギールを北京まで押送し、大ハン (道光帝) に献ずるよう命ずるのである。このようなイスハーク・ベグの関与は、筆致の違いはあれ、『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語附編 [『附編』: 409a–b] や [TKhSh: 94] でも示唆されている。

清朝史料に基づく河野の考察にしたがえば、イスハーク・ベグはジャハーンギール捕捉のため様々な工作活動に従事していた。しかし、捕縛の場面においては、自刃しようとしたジャハーンギールを「〔総管〕胡超, 〔都司〕段永福, 錫伯馬甲訥松阿・舒興阿, 兵丁楊發・田大武等が刀を奪



図1 「平定回疆戦図」の「生擒張格爾」[故宮博物院2002: 38]

32 清の東トルキスタン征服に協力したハディー (Hadī, 鄂対) の息子。名に含まれるベイス (beyis) は清の爵位である貝子 (Ma. beise) の音写である。

い生け捕った」³³とあり、史料中にイスハークの名は挙がっていない。

ジャハーンギールの捕縛は、清朝中央において大々的に宣伝されることになる。かつて乾隆帝は、「新疆」の獲得後、『平定準噶爾方略』の編纂、「平定準部回部得勝図」16幅の作成などを通じて征服と支配の正当性を宣揚することに努めた〔小沼2015: 336-341〕。ジャハーンギール戦役の終結後、『平定回疆剿擒逆裔方略』と「平定回疆戦図」14幅が作成されたことから、道光帝が祖父を模倣して戦果を誇示したことが窺える³⁴。そして、この「平定回疆戦図」の一枚であり、ジャハーンギールの捕縛の場面を描く「生擒張格爾」(図1)には、左上の山上でジャハーンギールを追い詰めた者たちの一人として「伊薩克」が描きこまれているのである。ただし、それはやはり第一の捕捉者としてではない(図2)。



図2 ジャハーンギールとイスハーク

- ①伊薩克, ②額喇古倫 (シベ營総管), ③舒興阿, ④胡超, ⑤田大武,
⑥訥松阿, ⑦張格爾, ⑧楊發, ⑨段永福

33 『宣宗実録』 卷132, 道光8年正月癸亥(23日) [1828/3/8] 条。

34 特に「平定回疆戦図」に含まれる「午門受俘儀」は、ホージャ・ジャハーン的首級が乾隆帝に献ぜられた場面を描く「平定準部回部得勝図」第14図の「平定回部献俘」とまったく同じ構図である。

ところで、上掲の清朝史料によれば、シベ (Sibe, 錫伯) 族のネスンガ (訥松阿, Nesungga) とシュシंगा (舒興阿, Šusingga) がジャハーンギール捕縛にかかわっていた。ジャハーンギールの侵入後、イリ駐防八旗のシベ營から徴発された兵丁は、天山山脈を越えて戦役に動員されていた。その顛末を描くシベ語の韻文叙事詩『カシガルの歌』(*Kašigar i ucun*) においては、ジャハーンギール捕縛は以下のように語られる。

熊の如き男、ネスンガ身を寄せて、ジャハーンギールを捉えたり。次いで登りし^{つわもの}兵、シュシंगाなるは剛の者。あとに続き、ともに捕縛せり。……ノコノコ来たるを見やったら、みな民人の兵、漢人の兵。「その功は我のもの」とのたまへり。吉林のシュ・アンバン [それを] 見て、功争いと思いたり。白黒つけんと人を派し、すべて尚書に報じたり。……イリの兵は勇壮ぞ。ネスンガ一人で追いつきて、まず以て捕縛せり。シベ部の兵は精鋭よ。シュシंगा続き追いつきて、ともに捕縛せり [KU: 17a-b: HU: 90-92]。

このように、シベ族の視点からは、ネスンガとシュシंगाこそが真の捕捉者であり、「民人の兵³⁵、漢人の兵」はその功績を横取りしようとした者として描かれているのである。

以上のように、ジャハーンギールの捕縛者については、芥川龍之介の『藪の中』よろしく、各史料間に矛盾が見られる³⁶。いずれが真相を語っているかは措くとして、歴史叙述や歴史認識が、それぞれの視点や都合に応じていかに創出されてくるのかを考える上で注目すべき事例である。この点を勘案すれば、TH におけるイスハーク・ベグの役割強調には、実際に彼はジャハーンギールの捕縛に深く関与していたのであろうが、それに加えて叙述者たるムッラー・ムーサーの何らかの意図が働いていたと考えられる。おそらくそれは、イスハークがアフマド王の父であったことと無関係ではあるまい。要するに、第3章におけるドゥグラト家アミールの系譜の強調と同じように、本論冒頭に登場するアフマド王にストーリーを収斂させていく効果を狙ったものだったと推測されるのである。

おわりに

本稿では、ムッラー・ムーサー・サイラーミーの『ハミード史』序論に注目し、「過去の参照」のあり方を検討してきた。当序論では、ノアの時代、テュルク人の起源から、1864年のムスリム反乱の前夜までが語られ、ムッラー・ムーサーは、史書・口碑から必要な情報を選集し、自身の批

35 ここでいう「民人の兵」(Ma. irgen i cooha) とは、旗人 (八旗の構成員) ではない兵丁という意味であり、具体的には緑營兵を指す。

36 コーカンド・ハン国史料では、ジャハーンギールを捕らえた者に関する詳しい記述はなく、敵対者も「ヒターイ」(中国人) あるいは「異教徒」として一括されている [MT II: 328-330]。

評も加えながら、これを構成していった。TA/Pantusov から TH/ZS まで発展する過程で文量は増大し、批評の増加にともない主観も強まっている。それらは行論や時系列の乱れを生じさせているが、普遍史を地域史へ、さらに現代史（本論）へと結びつけていく序論の目的は、テキストの別を問わず一貫している。アフマド王の系譜や中国王朝史など、本論への接続を念頭に挿入・添加されたと思しき記述は、たとえ本筋からの逸脱を招いているとしても、以上のような筆者の意図を反映したものといえよう。

ところで、Kim Hodong によれば、TA や TH の執筆という史的探究の営為を通じて、ムッラー・ムーサーは、モグーリスターン或いはイエッテ・シャフルという「地域」に暮らす「人々」を「発見」したという。地域的境界に基づく共同意思の出現である [Kim 1996: 3–4]。ただし、一つ注意しておきたいのは、本稿の第1章で言及したように、そもそも TA 執筆の前段階において、依頼者——ムハンマド・アミン・バイであれ、ペテロフスキーであれ——によって執筆対象の「地域」が事前に設定されていた可能性が否定できない点である。ムッラー・ムーサーの「発見」は、自己による純然たる発見だったのであろうか。或いは他者から与えられた枠組の中での発見だったのであろうか。今後の研究にゆだねたい。

参考文献

1. 史料

HU: Su Dešan (isebume teksilehe). *Hašigar ucun*, Sinjiyang niyalma irgen cubenše, 1984.

KU: *Kašigar i ucun* → 佟玉泉・佟克力輯注『錫伯族民間散存清代滿文古典文獻』686–695, 烏魯木齊: 新疆人民出版社, 2008.

MT II: Muḥammad Ḥakīm Khān. *Muntakhab al-tawārīkh, Selected History*, vol. II, edited by Yayoi Kawahara and Koichi Haneda, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 2006.

TA: Mullā Mūsā Sayrāmī, *Ta'rikh-i amniyya*, 1903.

TA/Jarring: Lund University, Jarring Collection, Prov.478.

TA/Muhämmät: Mulla Musa Sayrami. *Tarikhi ämniyyä*, nāshrgä täyyarlighuchi: Muhämmät Zunun, Ürümchi: Shinjang khälq nāshriyati, 1989.

TA/Pantusov: Н. Н. Пантусов, изд. *Таарих-и эмэние: история владельцев Кашигарии, сочинение Мулла Муса бен Мулла Айса Сайрами*, Казань: Типография Императорского Университета, 1905.

TA/Pelliot: Bibliothèque nationale de France, Collection Pelliot, B1740.

TA/SP: Институт восточных рукописей РАН, C335 (microfilm at Toyo Bunko).

TKhSh: Qurbān'alī Khālidī. 1910. *Tawārīkh-i khamsa-i sharqī*, Qāzān.

TH: Mullā Mūsā Sayrāmī, *Ta'rikh-i ḥamīdī*, 1908.

TH/Änwär: Mulla Musa Sairami. *Tarikhi ḥamīdī*, nāshrgä täyyarlighuchi: Änwär Baytur, Beyjing: Millätlär

nāshriyati, 1986.

TH/Jarring: Lund University, Jarring Collection, Prov.163.

TH/ZS: 中国社会科学院民族学・人類学研究所蔵 → 中国社会科学院甘肅省古籍文献整理編訳中心編『中国西北文献叢書・二編』41: 1-415, 蘭州: 線装書局, 2006.

TSh: Mullā Niyāz Muḥammad Khōqandī, *Ta'rikh-i shahrukhi*.

TSh/Pantusov: Н. Н. Пантусов, изд. *Таарих шахрохи: история владельцев Ферганы, сочинение Моллы Ниязи Мухаммед бен Ашур Мухаммед Кокандский*, Казань: Типография Императорского Университета, 1885

TSh/1787: IVANU, Ms.1787.

TSh/C468, ИБР РАН, C468 (microfilm at Toyo Bunko).

『綱鑑會纂』: 『重訂王鳳洲先生綱鑑會纂四十六卷; 續二十三卷; 增御撰資治通鑑綱目三編四卷』全16冊, 広島大学図書館(ス波文庫)所蔵.

『綱鑑易知録』: 吳乘權撰『綱鑑易知録』康熙50年(1711)序 → [吳・施1960]

『宣宗実録』: 文慶等撰『大清宣宗成皇帝実録』476卷, 咸豊6年(1856) → 12冊, 台北: 華文書局, 1964.

『附編』: ジャリロフ・アマンバク, 河原弥生, 澤田稔, 新免康, 堀直(2008)『『ターリーヒ・ラシーディー』 テュルク語訳附編の研究』東京: NIHU プログラム「イスラーム地域研究」東京大学拠点.

2. 二次文献

Änwär Baytur. 1986. "Molla Musa Sayrami wä «Tarikhi Hämidi»." TH/Änwär: 3-25.

Frank, Allen. 2009. "The Monghöl-Qalmāq Bayāni: A Qing-Era Islamic Ethnography of the Mongols and Tibetans." *Asiatische Studien*, 63 (2): 323-347.

Kamalov, Ablet. 2016. "Birth of Uyghur Nationalism History in Semirechu'ye: Nāzäryoja Abdusemäto'v and His Historical Works." *Oriente Moderno*, 96: 181-196.

Kim Hodong. 1996. "Tradition and Modernity in the Historical Writings of Milla Musa Sairaimi (1836-1917)," 1-9, presented at the 33th Annual Conference of Japan Altaist Meeting (Nojiriko Khuriltai), Shinano: Nojiriko Hotel (21-24 July, 1996).

———. 2004. *Holy War in China: The Muslim Rebellion and State in Chinese Central Asia, 1864-1877*. Stanford: Stanford University Press.

Kim Kwangmin. 2016. *Borderland Capitalism: Turkestan Produce, Qing Silver, and the Birth of an Eastern Market*. Stanford: Stanford University Press.

Klimeš, Ondrej. 2015. *Struggle by the Pen: The Uyghur Discourse of Nation and National Interest, c.1900-1949*. Brill Academic Pub: Leiden; Boston.

Mähmut Muhämmäd. 2003. *Tarikhiiy shäkhslär häddidä hekayilär 3 (5): Tarikhning közi, Musa Sayrami*.

Ürümchi: Shinjang khälq nāshriyati.

- Light, Nathan. 2012. "Muslim Histories of China: Historiography across Boundaries in Central Eurasia." *Frontiers and Boundaries: Encounters on China's Margins* (Zsombor Rajkai and Ildikó Bellér-Hann, eds.), 151–176, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Onuma Takahiro. 2014. "The Qing Dynasty and Its Central Asian Neighbors." *Saksaha: A Journal of Manchu Studies*, 12, 33–48.
- Quinn, Sholeh. 2021. *Persian Historiography across Empire: The Ottomans, Safavids, and Mughals*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schluessel, Eric. 2020. *Land of Strangers: The Civilizing Project in Qing Central Asia*. New York: Columbia University Press.
- Thum, Rian. 2014. *The Sacred Routes of Uyghur History*. Cambridge Mass.: Harvard University Press.
- Zhang Tieshan and Peter Zieme. 2011. "A Memorandum about the King on the *On Uyghur* and His Realm." *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hung*, 64 (2): 129–159.
- Ольденбург, С. Ф. 2018. "Дневник Туркестанской экспедиции, снаряженной по Высочайшему повелению Русским комитетом по изучению Средней и Восточной Азии." *Восточный Туркестан и Монголия: История изучения в конце XIX – первой трети XX века, Том II: Географические, археологические и исторические исследования* (Редактор: Б. М. Дмитриевич), 479–572, Москва: Памятники исторической мысли.
- Юдин, В. П. 1969. "Та'рих-и амнийя." *Материалы по истории Казахских ханств XV–XVIII веков: извлечения из персидских и тюркских сочинений* (Составители: С. К. Ибрагимов, Н. Н. Мингулов, К. А. Пищулина, В. П. Юдин), 476–490, Алма-Ата: Издательство «Наука» Казахской ССР.
- 濱田正美 1983 「十九世紀ウイグル歴史文献序説」『東方学報』55: 353–401.
- 1993 「「塩の義務」と「聖戦」との間で」『東洋史研究』52 (2): 122–148.
- 堀直 1987 「歴史認識と歴史叙述」西川正雄・小谷汪之編『現代歴史学入門』, 61–91, 東京大学出版会.
- 1988 「エンヴェル＝バイトゥル氏の近業「ハミーディ史」について: 紹介と「序文」訳」『甲南大学紀要 文学編』71: 30–46.
- 河原弥生 2020 「コーカンド・ハーン国史としての『選史』」『西南アジア研究』91: 94–118.
- 河野敦史 2016 「ジャハーンギールの侵入事件における伊薩克の活動に関する一考察」『中央大学アジア史研究』40: 1–28 [横組].
- 小沼孝博 2015 「「異人」イメージの政治性: 18–19世紀の清王朝と中央アジアの事例から」『東洋文化研究』17: 335–357.
- 2022 「ムザルト峠を越えて: 天山南北交通史序説」『東方学』143: 1–17 [横組].
- 塩野崎信也 2017 『〈アゼルバイジャン人〉の創出: 民族意識の形成とその基層』京都大学出版会.

- 新免康 1987 「ヤークーブ・ベグ政権の性格に関する一考察」『史学雑誌』97 (4): 1-42.
- 2009 「『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の叙述傾向に関する一考察 —— カシュガルの歴代ハーキム・ベグの部分を中心に —— 」『西南アジア研究』70: 111-131.
- 2017 「中国新疆におけるテュルク語叙述とヤークーブ・ベグ」『中央大学文学部紀要』62: 41-65.
- 菅原純 1996 「クーチャー・ホージャの『聖戦』とムスリム諸勢力 (1864-65)」『内陸アジア史研究』11: 17-40.
- 橘誠 2015 「モンゴルの国史編纂と翻訳文献：Ch. バトオチル抄訳『通鑑』・『綱目』について」『下関市立大学論集』59 (1): 93-103.
- 宇野伸浩 2002 「『集史』の構成における「オグズ・カン説話」の意味」『東洋史研究』61 (1): 110-137.
- 安瓦爾・巴依図爾 1984 「毛拉穆莎 = 莎衣然米和『伊米德史』」『民族研究』3 (1984): 26-33.
- 故宮博物院編、朱誠如種編 2002 『清史図典9：道光朝』北京：紫禁城出版社.
- 呉乗権等輯、施意周點校 1960 『綱鑑易知録』8冊、北京：中華書局.
- 吾斯曼江・亜庫甫 2012 「《安寧史》和《伊米德史》比勘」『中国边疆民族研究』6: 179-197

附記

本稿を執筆するに際して澤田稔・菅原純の両氏より有益な文献と情報をご提供いただき、Eric Schluessel 氏からも助言を得た。また広島大学図書館所蔵の『綱鑑會纂』の閲覧においては、同大学の船田善之氏及び図書館員各位のご厚情を賜った。ここに記して謝意を表す次第である。なお本稿は、科学研究費補助金 (17K03141, 18H00723, 20H01331, 20H01305) による研究成果の一部である。